

津大豆ニュース 令和2年産作柄報告版

令和3年3月17日

津地域農業改良普及センター

TEL:059-223-5103

1 概要

(1) 生育経過（雨による播き遅れで生育量が不足）

播種作業は、一部で6月下旬から7月下旬の間に行われたところがありましたが、雨天が続いたことから、ほとんどの地域は梅雨明け後の8月上中旬となりました。出芽、苗立は全体には良好でしたが、土壌が湿潤状態の時に無理をして播種をしたところでは、出芽不良のところも見受けられました。

播種作業が遅れたことから、生育量が少ないほ場が多くなりました。開花は8月上旬播きで9月10日頃からとなりました。生育量が少なかったことなどから、葉の黄化、落葉は比較的早く、成熟期は11月下旬頃となりました。

(2) 収量・品質（生育量不足とカメムシ被害により低収、品質低下）

播種時期の遅れにより節数、分枝数が少なく、その結果、着莢数が少なくなりました。また、やや小粒傾向であり、管内の平均単収は60kg/10a（昨年度74kg/10a）と非常に少なくなりました。品質面ではカメムシ類の多発による変形粒などの被害粒の混入が目立つところがありました。

(3) 病害虫（吸汁性カメムシ類が多発）

ハスモンヨトウによる白変葉が散見されましたが、多発したほ場はありませんでした。一方、カメムシ類の発生が例年以上に目立ち、吸汁被害による未熟粒の発生などにより減収につながりました。また、一部では青立ち株が見られました。

(4) 雑草（一部でホオズキ類、アサガオ類が蔓延）

ホオズキ類、帰化アサガオ類等が蔓延しているほ場が散見されました。生育量が十分に確保できなかったことから雑草が目立つところがみられました。

2 次作以降の対策

(1) 適期播種

早めの準備を心がけて、適期(7月上中旬)に播種作業を行いましょう。麦収穫後、すみやかに明渠の修繕を行い、雨水が停滞しないよう排水対策に努めましょう。近年、7月に雨が続いて適期に播種ができないことが多いため、6月下旬に播種が可能であれば少し早めから播種を開始しましょう。

(2) 播き遅れ対策

播種時期が7月下旬以降となる場合は、播種量を2割程度増やしましょう。条間を40cm程度の狭畦にして播くか、株間をできるだけ狭くして播きましょう。

注意：狭畦播種すると中耕培土ができないため、除草剤での雑草防除が主となります。

播種後の土壌処理剤と雑草発生後の茎葉処理剤により防除を徹底しましょう。

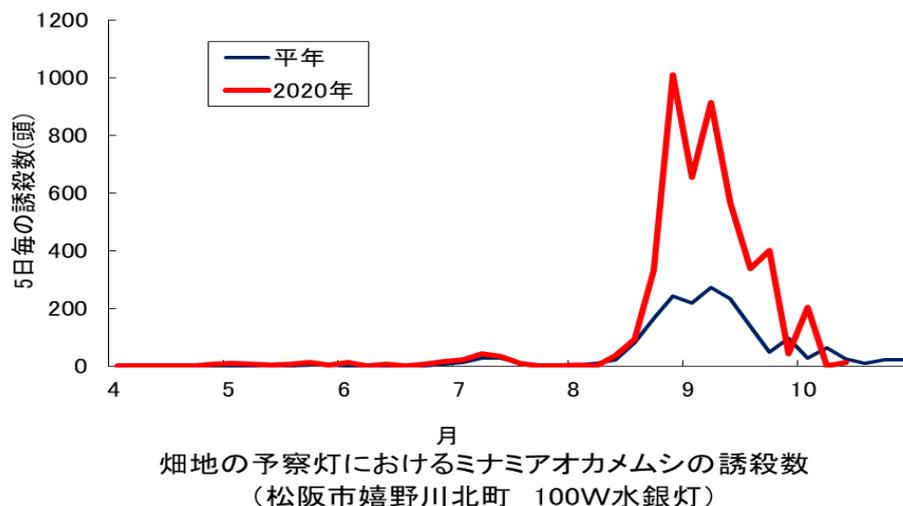
(3) 土壌診断、土づくり

土壌診断を播種前(できれば麦立毛中)に実施し、酸度矯正や不足する養分を補うため、土壌改良材等を施用しましょう。

また、麦稈の鋤込みによる窒素飢餓を回避するため、石灰窒素を10a当たり10~15kg施用すると有効です。

(4) 病虫害対策

ミナミアオカメムシ等の吸汁性カメムシ類の発生が増加しています。吸汁性カメムシ類は大豆の子実を吸汁し、未熟粒の発生や不稔莢等の原因となります。防除は開花後20日(莢伸長期)と開花後40日(子実肥大中期)の2回実施しましょう。(7月上中旬に播種したところでは9月中旬と10月上旬が目安)



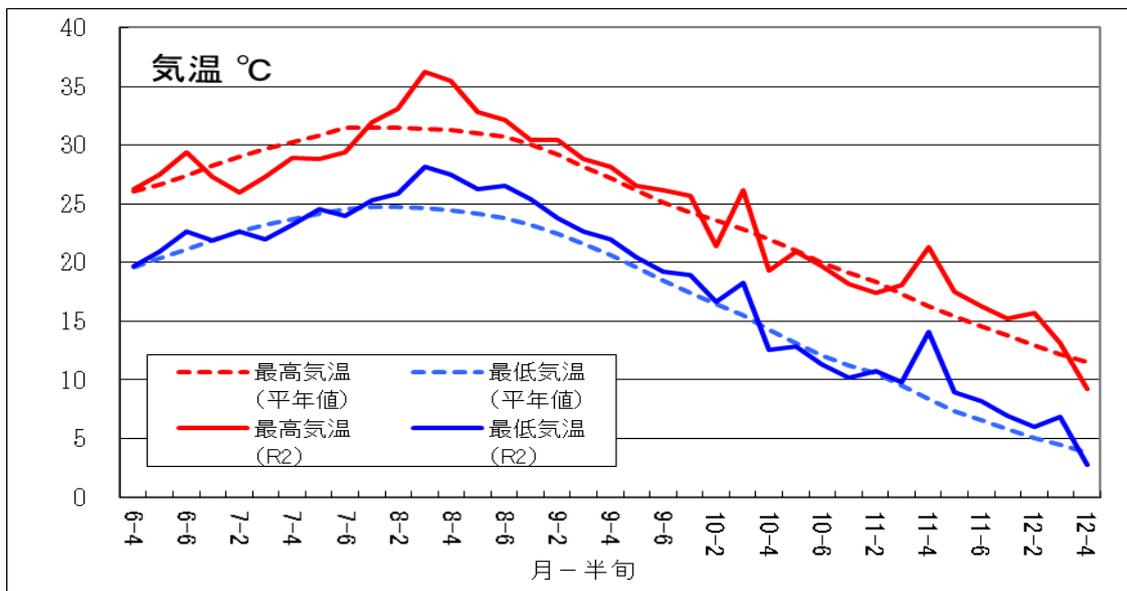
(5) 雑草管理

帰化アサガオ類、ホオズキ類等の強害雑草の発生が一部ほ場で見うけられます。これらの雑草は、収穫作業に影響を及ぼすとともに、汚粒の原因となります。茎葉処理除草剤の適期散布や中耕により、雑草の発生・生育を抑えましょう。また、生育ステージ後半まで残ってしまった雑草については、収穫までに手で抜き取り、抜き取った雑草は、畔やほ場内に放置せず処分しましょう。

3 参考資料

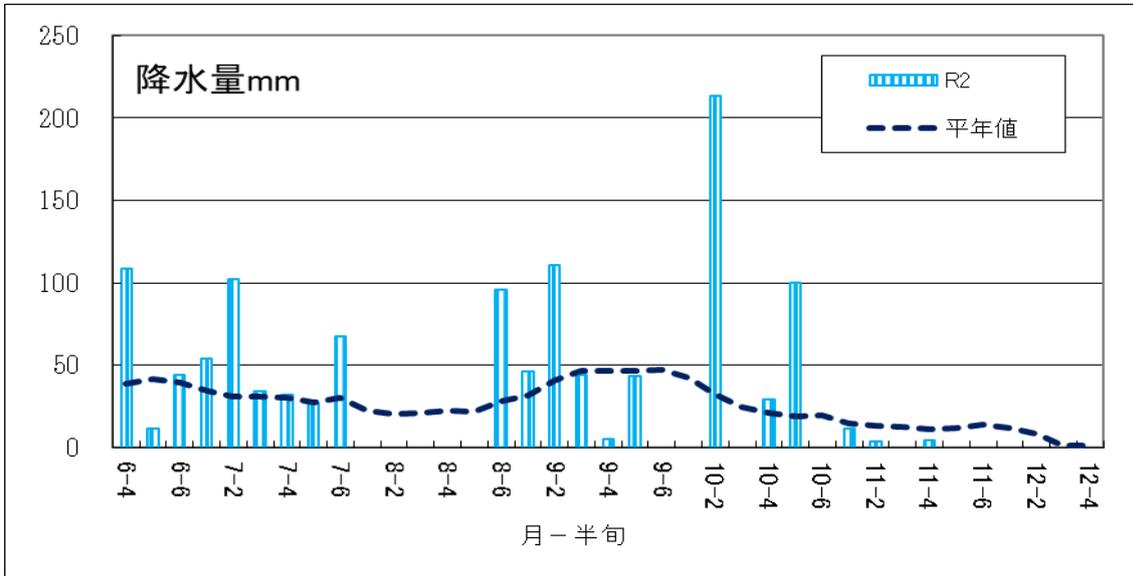
(1) 気温

7月は1か月間、平年より気温が低い日が続きましたが、8月に入ると非常に気温が高く、猛暑となりました。9月以降は平年並み～やや高めに経過しました。



(2) 降水量

梅雨の期間が6月中旬～7月末までと長く、この間、降水量は多くなりました。8月に入ると第5半旬まで全く降水がない日が続きました。その後は降水量が多く、8月第6半旬から10月末までの降水量は平年の1.5倍となりました。



(3) 日照時間

7月は曇雨天が続いたことから、7月中の日照時間が少なくなりました。梅雨明け後の8月は一転して日照時間が多くなりました。9月上中旬はやや少なく、9月下旬以降は平年並み～やや多い日照時間となりました。

